The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『ジャガイモをおいしくするもの』 : 笑いを誘うルワンダ詩
Author(s)	片山, 夏紀; Katayama, Natsuki
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 2020, 31, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76768
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『ジャガイモをおいしくするもの』
—笑いを誘うルワンダ詩—

片山　夏紀

0. はじめに

Indyohesha-birayi『ジャガイモをおいしくするもの』——「ルワンダ人なら誰でも大笑いする」と手渡されたルワンダ語の詩集のタイトルである。現地調査でお世話になったキリスト教カトリックの神父から紹介されたのは、8 章 64 ページで構成される詩であった。今でも神学校の生徒は、昔から伝わるその詩を暗唱している。この詩は読み聞かせで語り継がれ、一定のリズムで刻まれた歌のようで耳触りが良い。「この詩は聞いた者を笑わせる」と紹介されている通り（Kagame 1977: 4）、ルワンダの人々は笑いながらこの詩を語る。

筆者がこの詩に出会ったのは、ルワンダのジェノサイドにおける和解に関する現地調査を 2014 年～2016 年に行っていた時である。調査期間中はこの詩を読みたい衝動に駆られていたが、ジェノサイドの当事者への聞き取りや関連する裁判記録の閲覧に時間を費やし、詩を読む時間が取れなかった。ようやく帰国後に読み始めたものの直訳では意味が通らず、ルワンダ人の助けを借りて約 2 年半かけて読解した。

この詩には、直訳と真意が異なる表現が頻出する。これは「インショベラマハンガ（*inshoberamahanga*）」と呼ばれ、「外国人を惑わすもの」[1]という意味である。この詩の主役は豚であるが、詩が書かれた当時は豚を食することはタブーであった。しかし作者は位の高い者に敢えて豚を食べさせ、その場面でインショベラマハンガを用いている。位の高い者が競い合って豚を食べ、次のような台詞が出てくる。「目を閉じて食べる」、「噛まずに胃に流し込む」、「皿には何も残っていない！」と続いた後に突然、「私はずっとトゥチ（*Tutsi*）であるわけではない（*Nzira gusazira mu bututsi*）」（Kagame 1977: 41-42）という台詞が出てきて惑わされるが、これがインショベラマハンガである。次のような背景を認識していれば、直訳とは異なる真意を読み解くことができる。ルワンダのエスニック集団である「トゥチ」は、詩が書かれた当時は位が高い者とされていたため、その真意は、元来トゥチはタブーである豚を食べるような身分ではない、ということである。このように、インショベラマハンガを読み解くためには、ルワンダの歴史的・社会的背景を認識することが必要

[1] 名詞接頭辞 *in*-、動詞-*shobera*「惑わす」、*amahanga*「外国人」からなる。

であると考えられる。

本稿の目的は、ルワンダ人なら誰でも大笑いするという詩を多角的に分析し、この詩がなぜ笑いを誘うのかという問いを糸口にして、ルワンダの歴史的・社会的背景を考察することである。この詩を聞いてルワンダの人々が笑うのは、彼らがルワンダの歴史的・社会的背景を認識しているためである。本稿ではその背景を明らかにするため、詩のタイトルの由来、フィクションと史実を融合した詩の描写、インショベラマハンガという表現、ルワンダのジェノサイドにおける和解研究といった分野から多角的に分析を行う。

1 節ではルワンダの概要を述べる。一般事情に加え、本論に関係するエスニック集団とルワンダのジェノサイドに重点を置く。2 節では詩の作者の背景を紹介する。3 節では詩の概要を述べ、構成と形式に着目する。4 節では詩のあらすじを要約する。5 節では詩の特徴を、インショベラマハンガ、特定のエスニック集団を優遇する思想、ジェノサイドの和解研究に関連づけて分析する。6 節では、ルワンダ人なら笑うという詩の歴史的・社会的背景を考察する。

1. ルワンダ概要

1.1 一般事情

ルワンダ共和国はアフリカ中央の東寄りに位置し、人口は約 1,230 万人、国土面積は 26,338 平方キロメートルで四国の約 1.5 倍である。主要産業は農業で、コーヒー、紅茶、キャッサバ、イモ類、豆類、トウモロコシ、サトウキビ、料理用バナナなどを栽培し、主にコーヒーや紅茶を輸出している。首都キガリ（*Kigali*）には高層ビルが立ち並び、郊外では風景が一転してバナナ畑が広がる。

ルワンダでは1994年にジェノサイドが起こり、少なくとも50万人以上が犠牲になった。しかしながらその後の目覚ましい復興は「アフリカの奇跡」と称され、2008 年～2018 年の 10 年間の平均経済成長率は 7.5%と高く[2)]、情報通信技術（Information and Communication Technology: ICT）に力を入れ、海外企業を積極的に誘致している。しかし国連安全保障理事会（United Nations Security Council: UNSC）の報告書によれば、ルワンダは西に隣接するコンゴ民主共和国から鉱物資源を違法に入手しており（UNSC 2001）、発展の背景にはこの

2) ‘The World Bank in Rwanda, Overview’ https://www.worldbank.org/en/country/rwanda/overview（2020 年 2 月 10 日閲覧）

ような現実がある。

1.2 エスニック集団

『ジャガイモをおいしくするもの』の作者はエスニック集団を重視しているため、その背景を概説する。ルワンダは 3 つのエスニック集団から構成され、人口の 8 割強をフトゥ（*Hutu*）、1 割強をトゥチ、1%程度をトゥワ（*Twa*）が占める（武内 2009: 83）。3 つの集団はともにルワンダ語を話し、信仰する宗教にも違いはなく、同じ村で暮らし、異なる集団間の結婚も多い[3]。1700 年頃、ルワンダには複数の王国が存在し、これらの王国は領土拡大のため、時には同盟を結び、時には戦闘を繰り広げた（鶴田 2018: 39）。中でもニギニャ（*Nyiginya*）王国がルワンダ国内で権力を確立し、領土も拡大した（鶴田 2018: 40）。ニギニャ王国の中央集権化と領土拡大に伴って、トゥチとフトゥが区別されていった。19 世紀後半に強固な軍隊が設立され、「トゥチ」は「戦闘員」、「フトゥ」は「非戦闘員」を意味していたが、その後は「トゥチ」がニギニャ王国から派遣された者、「フトゥ」が地元の者を指すようになった（鶴田 2018: 42）。

ドイツとベルギーによる統治下では、王国時代の区別とは異なり、トゥチ、フトゥ、トゥワは体型で分けられた[4]。統治局は、長身で痩型をトゥチ、やや低身長でずんぐりとした体型をフトゥ、短身の者をトゥワに分けた。体型に着目した背景には「ハム仮説」と呼ばれるヨーロッパの人種思想がある。これについては 5.2 で述べる。

1.3 ルワンダのジェノサイド

ドイツとベルギーの統治下ではトゥチが優遇され、教育や就労の機会が与えられた。それに不満を抱いたフトゥのエリートが 1960 年前後に革命を起こし、優遇されたトゥチを追放し、1962 年の独立の際にフトゥの大統領が就任した。国外追放されたトゥチ難民を中心とした武装勢力「ルワンダ愛国戦線（Rwandan Patriotic Front: RPF）」が結成され、1990 年以降ルワンダに侵略し、フトゥ中心の旧ルワンダ政府と対立した。1994 年に与野党の急進

---

[3] ルワンダ統計局（National Institute of Statistics of Rwanda: NISR）によれば、キリスト教徒（カトリック、プロテスタント、アドヴァンティスト）は人口の約 95%、イスラム教徒は約 2%、無宗教者は約 2.5%、その他は約 0.5%である（NISR 2014: 22）。

[4] ルワンダは、1899 年にドイツ領東アフリカの一部になり、ドイツの保護領になった。第一次世界大戦でドイツが降伏すると、国際連盟委任統治制度のもとで、ベルギーに統治されることになった。第二次世界大戦後に国際連合が設立されると、連盟委任統治制度は国連信託統治制度に引き継がれ、ベルギーによる統治は 1962 年の独立まで続いた。

派がジェノサイドを扇動し、トゥチと、フトゥ穏健派が標的になり、少なくとも 50 万人以上が犠牲になった。軍人や民兵だけでなく、民間人も殺害や暴行や窃盗に加担した。3 ヶ月後に RPF がルワンダを制圧し、政党として現在も政権を執っている。

ジェノサイド時に RPF を率いたポール・カガメ（Paul Kagame）は、2000 年に大統領に就任し、憲法改正により最長 2034 年まで任期を継続できる[5]。彼はアフリカ連合（African Union: AU）における機構改革を主導し政治的手腕を振るう一方で、野党メンバーへの弾圧を繰り返し行っている。

2. 作者紹介

『ジャガイモをおいしくするもの』の作者アレクシス・カガメ（Alexis Kagame, 1912 年～1981 年）はルワンダ出身の哲学者、言語学者、歴史学者、神父、詩人という多彩な肩書きをもつ。奇しくもポール・カガメ大統領と同じルワンダ名だが、親族ではない。アレクシス・カガメはトゥチの出身で、彼の父は「アビイル（*abiiru*）」と呼ばれる集団に属していた。アビイルはいわば王の顧問団であり（武内 2009: 97）、王に仕え伝統や儀式を守り、次期国王を決定する権限を有していた（鶴田 2018: 40-41）。

ルワンダの歴史学者でベルギー人のヤン・ヴァンシナによれば、カガメの功績は、これまで書き記されてこなかった口頭伝承を記録したことである。彼は、王の系図を覚える者（*abacurabwenge*）、王の言行を記憶する者（*abateekerezi*）、王を褒め称える時に読む詩を暗唱する者（*abasizi*）の口述を記録した。また、アビイルが内々に語り継いできた王朝儀式の決まりごとも記録した（Vansina 1985: 37-38）。

カガメの意図は、『ジャガイモをおいしくするもの』を通して、ルワンダの史実や伝統を語り継ぐことであったと考えられる。ルワンダでは位の高いものを褒め称える慣習があり、牛は婚約の結納品として昔から重宝され、結婚式では牛にまつわる歌が披露される。一方で、豚は汚い動物として軽んじられてきた。牛は位が高いもの、豚は位が低いものとされるが、カガメの詩は豚を位の高いものとして褒め称え、聞き手を笑わせる。この詩のユーモアが広く受け入れられ、それに絡めてルワンダの史実や伝統が語り継がれている。

3. 詩の概要

この詩は豚が主役であり、豚のエピソードで全章が描かれている。豚を「ライオンより

[5] 憲法改正の経緯については武内（2016）を参照。

も勇猛」と賞賛し、「最もおいしい家畜」と褒め称える。1 章〜8 章すべての最後は「ジャガイモをおいしくするもの！」と結ばれ、本編を読めばそれが豚のことであると分かる。

3.1 「ジャガイモをおいしくするもの」の由来

「ジャガイモをおいしくするもの」という言葉の由来をまとめておく[6]。20 世紀初めに、ヨーロッパ人の宣教団がルワンダで布教活動を始めた。現地には無かった食用の豚を飼育し、ジャガイモを持ち込んで栽培し、神学校の生徒たちに食べさせようとしたが、受け入れられなかった。ルワンダでは野生の動物を食すことは禁忌であり、野生のイボイノシシに豚が似ているという理由で嫌厭された。また、ジャガイモの形は男性の睾丸に似ているとされ、忌避された。宣教団は、神学校の生徒たちに豚肉とジャガイモを食べさせるために、それらをすり潰して形が分からないように料理した。その結果、生徒たちはそれが豚とジャガイモであるとは気づかず、おいしいと好評であった。神学校の生徒であったカガメは「この料理の材料は何か」と興味を持ち、調べた結果、豚肉とジャガイモであることが分かった。豚肉とジャガイモのおいしさに気づいたカガメは、ルワンダの人々が豚とジャガイモを食べない習慣を変え、食べるようになってほしいと考えた。

当時、ルワンダはベルギーの統治下にあり、7 月 21 日のベルギー建国記念日にキガリで祝宴が開催された。ベルギーの行政官とムタラ・ルダヒグワ王（Mutara Rudahigwa）及び全国のチーフが招待されることになっていたが、宴で振る舞う牛肉が用意できなかった。そこでカガメは、宴で位の高い者に豚とジャガイモを広める好機と考え、豚とジャガイモの所有者であるヨーロッパ人の神父に提案した。大きな 1 頭の豚とジャガイモが神学校からキガリまで運ばれ、それらが宴で振る舞われ、絶品と評判になった。その結果、豚の肉汁でジャガイモを炒めるとおいしいことから、「ジャガイモをおいしくするもの」という言葉がうまれた。そして、この豚が運ばれて、食されるまでの経緯を綴ったのが、この詩『ジャガイモをおいしくするもの』である[7]。

---

[6] 2020 年 2 月、筆者の知人のルワンダ人が、キガリのルワンダ言語文化協会（Rwanda Academy of Language and Culture: RALC）の職員から聞き取った話に基づく。
[7] カガメは実話を脚色して聞き手を楽しませる「アマカビャンクル（*amakabya nkuru*）」（「大げさに話す」の意）という手法を用いてこの詩を広め、豚とジャガイモがルワンダ人に知れ渡った。

3.2 構成

『ジャガイモをおいしくするもの』が執筆されたのは 1941 年～1942 年である[8]。1949 年に初版が発行されて多くの人々に広まり、聞き手の要望に応じて 1977 年に第 2 版が発行された（Kagame 1977: 2）。この詩集は以下のような構成になっている。「はじめに」の次に本編の詩が第 1 章～第 8 章まで続く。本編は散文詩ではなく 1,046 行の短い文を連ねている。1 行あたり約 15 字～30 字で、1 から順番に 5 行ごとに行数番号が振られている。8 つの章は各々長さが異なり、最短の章は 50 行、最長の章は 427 行である。本編の後は「アマハンバ（*amahamba*)」と呼ばれる歌の詩で締めくくられる。アマハンバとはルワンダに昔から伝わる牛の歌で、ここでは牛を豚に置き換えている。巻末には 59 の脚注と、1941 年～1942 年のチーフ名一覧が付いており、当時の行政機構を知ることができる。詩集の大きさはタテ 11.5cm、ヨコ 9.5cm の手のひらに載るサイズで、価格は 250 ルワンダフラン（日本円に換算すると約 30 円）である。

3.3 形式

豚が活躍するという発想はカガメのオリジナルだが、彼は古典的な詩の形式を守ることにこだわった。ルワンダでは「イビヴゴ（*ibyivugo*）」や「イビシゴ（*ibisigo*）」など形式の異なる詩が語り継がれ、彼は豚の詩を書く前にそれらを暗記して各々の形式を研究し、最終的に「アマズィナインカ（*amazina y'inka*）」という形式を選んだ（Kagame 1977: 3）。「アマズィナインカ」はブルンジ語であり、ルワンダ語に訳すと「牛の詩」になる[9]（Kagame 1977: 2）。

「牛の詩」は、昔から伝わる牛使いの詩である。今でも結婚式で読み上げられ、筆者が現地で参列した式では牛使いに扮した男性が歌い上げた。音程は高すぎず低すぎず、耳触りが良く一定の抑揚が繰り返される。牛使いは「ムシャナナ」と呼ばれる伝統的な布を肩から斜めがけにし、片手に杖を、もう片手に牛の毛を解くブラシ代わりの木の葉を持つ。「牛の詩」の内容は、新郎新婦が 1 人の牛使いに出会い、おいしい乳をたくさん出すギタレという名の牛を紹介してもらうところから始まる。牛使いは 1 頭 1 頭に名前をつけて大

---

[8] インターネットで詩集全文を読むことができる。http://kimenyi.com/Indyohesha-birayi.pdf（2020 年 1 月 30 日閲覧）ただしアップロードされている PDF ファイルのページ数と、本稿の引用のページ数は一致しない。筆者は現地で入手した紙媒体の詩集を引用しているためである。

[9] ブルンジ語は、ルワンダの南に隣接するブルンジ共和国の主要言語であり、ルワンダ語と非常に似ている。

切に飼っていた。新郎は夢で神様に会い、ギタレと名付けられた牛がニャルゲンゲという場所にいると教えてもらう。新郎がニャルゲンゲへ行き、ギタレを連れて新婦のもとへ帰ってくる。他にも牛にまつわる詩が約 5 分間続く[10]。

この「牛の詩」の形式の特徴は、複数の章に分かれること、すべての章の終わりに繰り返し同じ言葉を用いることである（Kagame 1977: 2）。カガメはこれらの形式に則って豚の詩を 8 つの章に分け、すべての章の終わりに「ジャガイモをおいしくするもの！」という言葉を繰り返した。

カガメは「牛の詩」を手本にしたため、詩集のタイトルを『豚の詩』にしたが、周囲から『ジャガイモをおいしくするもの』の方が適しているという声が上がり、変更した（Kagame 1977: 2-3）。タイトルに「豚」が用いられないことで聞き手の想像をかき立てる効果を生んでいる。あるルワンダ人が小学校でこの詩を習った時、「ジャガイモをおいしくするもの」を塩やスパイスと想像したが、読み進めるうちに豚であると分かり面白かったという。

豚の詩の本編には、王、チーフ、神父、ベルギーの行政官など実在する位の高い者が登場し、豚を褒めちぎる。この詩が発表された当時、このような内容に対して聞き手は、笑い飛ばす一方で、「位の高い者が豚に敬意を払う描写が、彼らの怒りを買うのではないか」という懸念もあった。それに対してカガメは、「ウブセ（*ubuse*）」と呼ばれるフィクションの形式に則っているため登場人物を批判するものではなく、怒りを買うことはないと述べる。ウブセに忠実だからこそ、聞き手を笑わせ楽しませることができると強調している[11]（Kagame 1977: 3-4）。

4. 詩のあらすじ

3.1 で記したように、この詩には豚が運ばれて食されるまでの経緯が綴られている。カガメは、この詩で豚を堂々と闊歩させ、旅の先々で起こる人々とのエピソードを挿入した。カガメは神父であったため、本編にはキリスト教に縁のある地名が出てくる。したがって豚が旅したのは、教会や神学校が建てられている場所であり、これらの地名が各章のタイトルに記されている。詳細は「図 1. 豚の旅の経路」を参照してほしい。

---

[10] 2016 年 7 月 23 日、東部州ンゴマ郡で催された結婚式での聞き取りより。

[11] ウブセの詳細は、カガメの他の著作 *Iyo wiliwe nta rungu*『この午後は孤独ではない』（1959）で解説されている（Kagame 1977: 4）。

第 1 章は、牛舎で飼われている牛がライオンに狙われる詩である。この牛は王が所有するイニャンボという種類で、大きく立派な角をはやす。本編の始まりは、豚の価値は低いが肉は上質だ、豚はライオンを睨み殺すほど強いと豚を褒めており、すべての章はこのような豚への賛辞から始まる。牛使いはライオンを追い払うために「尻尾はあっち、目はこっち！」と呪文を一晩中唱えたが追い払えなかった。他にもあれこれと策を講じた挙げ句に牛使いは牛舎の前にサツマイモを置き、近くにいた豚がそれを貪り食った。ライオンの目は豚に向き、その隙に 5 頭の牛を逃がすことに成功する。第 1 章は次のように締めくくられる。「牛使いはイニャンボ牛と同じように豚に敬意を払った、『ジャガイモをおいしくするもの！』」（Kagame 1977: 8）

第 2 章は、豚が牛使いを怖がらせる詩である。豚はサツマイモ畑の畝を荒らす。鼻をとがらせてツルを引っ掻き回し、サツマイモを掘り起こして貪り食う。サツマイモを消化する腸の音が豚の腹から響き渡って、牛使いはライオンが吠えていると勘違いして怯える。第 2 章は次のように締めくくられる。「ライオンに牛を食べられると牛使いは貧しくなる、牛使いは『新しい牛』を持っていない、『新しい牛』は『ジャガイモをおいしくするもの！』」（Kagame 1977: 11-12）

第 3 章は、マジョーロ（Majoro）と呼ばれる位の高い者が豚を探し求める詩である。マジョーロは町に住む人々に、宴で振る舞う豚肉を差し出すよう命じる。命じられた人々は、田舎者から豚を安く買い叩いて集めたが、宴に最適な豚は見つからなかった。安く買い叩かれた田舎者は、町に住む人々を「食えない奴（*bakulyalya*）」と皮肉り、この言葉は現代のルワンダでも使われる。本章の登場人物は以下のように描写されている。町に住む人々はイスンズと呼ばれるモヒカンのような髪型で洋風のコートを羽織り、田舎者は伝統的なムシャナナをまとい、洗練された雰囲気と田舎っぽさを対比させている（Kagame 1977: 12-13）。豚を所有していないかと聞かれたチーフは「私は断じて所有しておりません！私が太っていた時に食べてしまいました、見てください、私が残りの豚です」と弁明した（Kagame 1977: 15）。マジョーロは、ニャキバンダ（*Nyakibanda*）という神学校や大きな教会のある所に住む白人の神父が、宴に最適な豚を所有していると聞きつける。そこでマジョーロは、神父宛に豚を譲ってもらう手紙をしたためる[12)]。第 3 章は次のように締めくく

[12)] 詩集によればこの神父は、実在するオランダ出身の宣教師ファン・ウーデン（Van Uden, 1889 年～1946 年）である。彼は「ビトゥガンガンド（Bitugangando）」（「大きくて強い者」の意）と呼ばれ、ニャキバンダの神学校に務めた（Kagame 1977: 58）。ウーデンは、ルワンダにカトリックを普及させた宣教団ホワイト・ファーザーズの一団員である。彼の実名が登場することからも、カガメとカト

られる。「マジョーロは手紙を巻いて封をして遣いに手渡した、遣いはニャキバンダを目指した、『ジャガイモをおいしくするもの！』」（Kagame 1977: 17）。

第 4 章は、ブタレ（*Butare*）からニャンザ（*Nyanza*）まで豚が移動する詩である。ブタレは南部に位置し、ルワンダ第 2 の都市であり、博物館、大学、神学校などがある。ニャンザは南西部に位置し、1.2 で述べたニギニャ王国が繁栄し、王宮があった場所である。ブタレで、腹をはちきれんばかりに膨らませた豚が移動している。豚が道を塞ぎ、車が渋滞して運転手を苛立たせる。運転手に苦情を言われた者が「道は 1 本しかない。空中に道をつくれというのか？」と切り返す。豚は地面を割れんばかりに踏み鳴らし、世界が揺れた。豚の足音はブタレから遠く離れたニャンザまで響き渡り、人々は何事かと驚き叫ぶ。高い場所から様子を伺い「ヨーロッパ製のマシーンだ！」、「いや1頭で4頭分の大きさの象だ！」と騒ぎ立てる。ブタレで足止めを食った者が、ユーカリの森を抜け、豚より先回りしてニャンザにやってきて「あれは豚だ」と説明した。すると突然これまでの話が断ち切られ、道を塞いだ豚とは別の豚が登場する。別の豚は違う場所からニャンザにやってきて、捕まえられ料理されて宴で振る舞われる。第 4 章は次のように締めくくられる。「豚の足の爪が料理された、それが『ジャガイモをおいしくするもの』」（Kagame 1977: 22）。

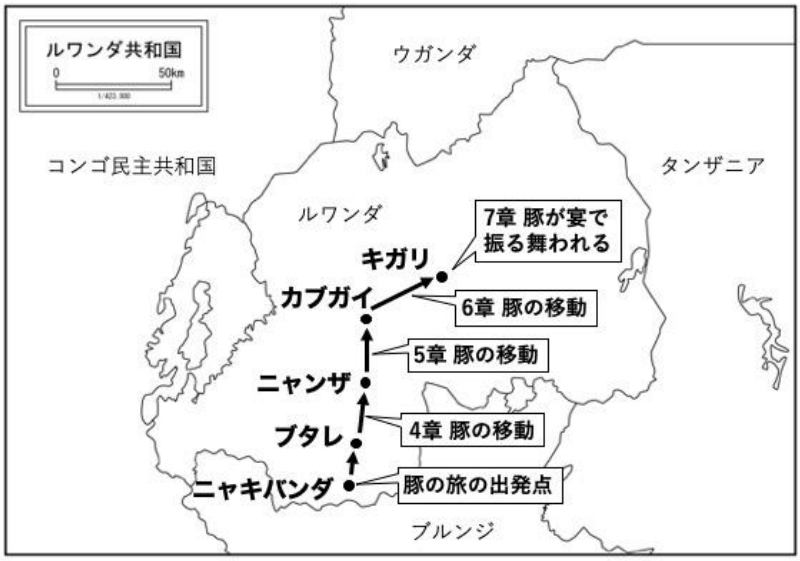
第 5 章は、ニャンザからカブガイ（*Kabgayi*）まで豚が移動する詩である。カブガイは首都キガリから 40km 南西に位置し、神学校や教会が建てられている。豚がのろのろ歩きから早足になると雷のような地響きがして、人々は雨雲と勘違いして一目散に家に帰って干し物を取り込んだ[13]。雨宿りをしようと軒下やユーカリの木の下に走る者や、牛使いのサイザル麻のミノを被る者もいた[14]。ミノを持たない者はバナナの葉を頭から覆った。ある者は「戦車がやってくる、イギリス人が戦いに使ったものだ！間違いない」と叫び、豚に群がった女性たちが「これが戦車ね！」と囃し立てる。しかし別の者は「これは戦車ではない、私達がよく知る家畜だ！皆この家畜が好きだ！これでスープを作るとおいしいのですぐに平らげてしまう」と言った。第 5 章は次のように締めくくられる。「国中を移動する豚を我々はもはや豚と呼ぶことはできない、選ばれしものにふさわしい名をつけよう、『ジャガイモをおいしくするもの』」（Kagame 1977: 27）。

リックの関係の強さが窺える。

13) 筆者が現地で遭遇した雨雲は黒々としておどろおどろしく迫り、突発的な大粒の雨を大量に降らせた。

14) ルワンダでは、サイザル麻とイシンギ草で、伝統工芸品のゴザやバスケットを編む。

図 1　豚の旅の経路



第 6 章は、カブガイからキガリまで豚が移動する詩である。チーフたちは豚に付き従い、豚は優越感に浸っていた。移動する豚を追うチーフのセムゲシ（Semugeshi）は車に乗っていた。他 2 人のチーフに「乗せてほしい」と頼まれたが、彼は豚肉の取り分が減るのを嫌がった。「私の車は乗っている者を察知してすぐに見分ける！もし私以外が乗れば車はガソリンを使い果たし、酔っ払ったように狂って疲れ果てる。点滴を買わなければならない、それを打つと元に戻る」と断った。第 6 章はセムゲシの言葉で締めくくられる。「2 人の取り分は私が頂く、その家畜で空腹が満たされる、『ジャガイモをおいしくするもの！』」（Kagame 1977: 31）

第 7 章は、キガリに辿り着いた豚が料理され、宴で振る舞われる詩である。その豚肉は砂糖のように甘くておいしい。宴には全国から参列者が集い、王、チーフ、白人もいる。王は喉をゴロゴロ鳴らして豚のスープを最後の 1 滴まですする。参列した 47 人のチーフは豚肉を噛まずに飲み込む競争をし、汗だくになったり、身悶えしたり、のどに詰まらせて泣いたりする。「靴を履く者（*abanyakweto*）」は豚肉を咀嚼し続け、ほっぺたの肉になった[15]。第 7 章は次のように締めくくられる。「牛を追い払え、新たに飼うのは『ジャガイモをおいしくするもの！』」（Kagame 1977: 50）

[15]「靴を履く者」は、ベルギーの行政官と推測される。市民で靴を履ける者は当時ほとんどいなかったためである。

第 8 章は、「豚肉は他の食材を貧しくする」というタイトルの詩である。貧しくするとは、料理された牛肉、皿の上の鶏肉、裏庭のヤギ肉、鍋に入った羊肉よりも豚肉が「勝っている」という意味である。豚は裏庭を占拠して王のように居座り、チーフのように振る舞い、まるで健康でよく成長した牛のようである。宴の主役は豚肉で、白人も食べにやってくる。豚肉を食べた者はニャマトゥリという腹の大きな虫のようになる。第 8 章は次のように締めくくられる。「豚は他のどの動物よりも勝っている、豚は称えられ皆に食べられるだろう、私が初めに名付けよう、『ジャガイモをおいしくするもの！』」（Kagame 1977: 52）

5. 詩の特徴

5.1 インショベラマハンガ（直訳と真意が異なる表現）

0.はじめにで述べたように、この詩には、直訳と真意が異なる「インショベラマハンガ」と呼ばれる表現が頻出する。筆者が現地で教えてもらったインショベラマハンガの 1 つは「アバゲセラのように去った」である。アバゲセラ（*Abagesera*）はルワンダのクランの 1 つであり、直訳は「アバゲセラのように去った」だが、「挨拶なしに帰った」という真意を隠す間接的な表現として使われる[16]。筆者が現地で聞き取った用例がある。日本の知人が挨拶をせず帰国すると、あるルワンダ人は筆者に「アバゲセラのように去ったと彼女に伝えてほしい」と述べた。そのルワンダ人は、彼女が真意を読み取れず惑うことを承知のうえで、敢えて筆者に言付けた。彼女に直接文句を言うと角が立つため、インショベラマハンガで真意を隠して皮肉った事例である。

このようにインショベラマハンガは真意を隠す表現であり、『ジャガイモをおいしくするもの』にも用いられる。例えば第 5 章に、豚のことを戦車と勘違いした者の場面がある。以下、本編に書かれてある通りに引用する（下線と日本語訳は筆者記入）。本編は行単位で書かれ、5 行ごとに行数番号が振られ、その番号の横に詩が続く（インショベラマハンガに該当する行数番号 429 は筆者記入）。

---

[16] クランには血縁もエスニック集団も混ざっている。アバニギニャ（*Abanyiginya*）やアベガ（*Abeega*）など約 20 前後に分類され、各クランは鷲や猿やライオンなどを象徴とし、アバゲセラはセキレイ（鳥）を象徴とする。

425 *Yaba wenda ije kunyenda.*（戦車はおそらく私のところへやって来る。）

Kuko ikunda abo yamenyereye:（戦車は闘いをよく知る者が好きだから：）

Murankingire itandeba,（私を匿ってくれ、戦車から見えないように、）

Ngumye nsemulire abatayizi.（匿われ続ければ戦車に気づかれない。）

429 *Iyo ntirwana irakaba ukwo ili!*（戦車は闘わない、怒り狂ったように！）

430 *Irasa amabomboma ukayikunda,*（戦車は思うままに爆弾を放つ、）

Irasa imizinga ikica ibintu,（戦車の大砲で物を破壊する、）

Irasa amasasu yo mu mbunda;（戦車は銃弾を放ち；）

Irasa n'imyambi mwumve na mwe!（戦車は矢も撃ち落とす、信じられるかい！）

（Kagame 1977: 24）

429 行目下線部がインショベラマハンガであり、構成は以下のようになる。

nti-i-rwana > *ntirwana*

否定-主語接辞 (戦車)-闘う

下線部の直訳は「戦車は闘わない」だが、それでは直後の「怒り狂ったように」と辻褄が合わない。その後には戦車の描写が続くため、下線部の真意は「戦車は闘う」になる。このように本編の所々にインショベラマハンガが登場し、聞き手はその都度思考を惑わされる。

5.2 ハム仮説とチーフ

この詩でトゥチが優れた者と描写されるのは、「ハム仮説（Hamitic Hypothesis）」と呼ばれる思想に由来すると考えられる。なぜなら、カガメはハム仮説を支持した歴史学者としても著名なためである。ハム仮説とは、トゥチとフトゥを別の人種とみなすヨーロッパの思想であり、先行研究を分析すると、この学説は既に説得力を失っている（武内 2009: 91）。旧約聖書に登場する白人ハムがアフリカに文明を伝えたという記述から、ルワンダを統治したヨーロッパ人はトゥチが白色人種ハムの血を引くと考え、トゥチを優遇した[17]。統治局はハム仮説を支持したため、ほとんどのチーフをトゥチに担わせた[18]。カガメは実在す

[17] ハム仮説の詳細は、武内（2009）や鶴田（2018）を参照。

[18] 統治が始まる前の行政機構においても、チーフの多くはトゥチであったが、フトゥが就任した役

るチーフを詩に頻繁に登場させ、巻末のチーフ名一覧で参照できるようになっている（Kagame 1977: 61-64）。例えば第 6 章で、チーフが豚に付き従う場面で「豚はトゥチのチーフよりも優越感に浸っている」と描写する（Kagame 1977: 28）。豚の引き合いにチーフを出し、豚とチーフの位を逆転させることで、チーフの位の高さを明示している。

5.3 ジェノサイドの当事者の和解研究との関連

この詩には、登場人物の共感や喜びを表す描写に「*imbabazi*（インババジ）」という言葉が用いられている。例えば第 5 章では、豚のことを戦車だと勘違いした者が、その恐ろしさを女性たちに説明する場面がある。その一節を引用すると、勘違いした者は「戦車は多くの敵を倒すことができる！」、「人々が戦車に矢を放つ」、「戦車は矢を避ける」、「飛行機が戦車を追いかける」、「この戦車は飛びたい時に飛べる！」と説明し、「女性全員が共感した（*Abagore bose bagira imbabazi*）」と続く。女性の共感を表す描写に *imbabazi* という名詞が使われている（Kagame 1977: 25-26）。また第 7 章では、豚肉を食べてチーフが喜んでいる場面がある。その一節を引用すると、「豚肉をもらって私は嬉しい」、「喜びが胸を打ち、この喜びが海になる（*Imbabazi inteye zikaba inyanja*）」、「この喜びは、この豚を産んだ母豚以上だ」と続く。チーフの喜びを表す描写に *imbabazi* という名詞が使われている（Kagame 1977: 42）。

しかし現地調査では、*imbabazi* は赦しや恩赦を表す言葉として使われていた。筆者の研究テーマは、ルワンダのジェノサイドにおける当事者の和解である。加害者から *imbabazi* という言葉を聞き取ったのは、ジェノサイドで略奪した牛の賠償金をめぐって、この加害者が被害者と交渉した場面である。この賠償金は、ジェノサイドに関連する罪を裁くためのガチャチャ裁判（*Inkiko Gacaca*）で、器物損壊罪や窃盗罪で裁かれた加害者に命じられた。命じられた額を支払うことができない加害者は、被害者と直接交渉して賠償金の減額や帳消しを願い出る。その交渉で使われる言葉が*-saba imbabazi* であり、直訳すると「赦しを求める」になる。また被害者が加害者の要求をのむ時に使う言葉が*-babarira* であり、直訳すると「赦す」になる。動詞*-babarira*「赦す」から派生した名詞が *imbabazi* である[19]。ジェノサイド以降、*imbabazi* は罪の償いや赦しを表す言葉として使われるようになり、キ

職もあった（武内 2009: 118）。

[19] ジェノサイドの被害者と加害者が、ガチャチャ裁判の賠償をめぐる交渉で「赦す」あるいは「赦しを求める」という言葉をどのように用いているのか、詳細は片山（2019）を参照。

リスト教の儀礼や揉めた相手との関係修復の場面を除いて日常的にはあまり使われない。この詩の *imbabazi* は共感や喜びを表し、奥深い感情表現として使われている。筆者が聞き取ったジェノサイドの当事者が、*imbabazi* を使ってお互いの胸の内を察する感情表現と重なる。

6. 考察

これまでの分析を踏まえて、この詩の描写から見えてくるルワンダの歴史的・社会的背景を考察する。まず、この詩はフィクションと史実を融合させ、当時の歴史的背景を示している。「はちきれんばかりの豚の腹が道を塞ぐ」（Kagame 1977: 18）といった豚のコミカルなフィクションの中に、カガメは実在の王やチーフや神父を登場させて史実を伝えている。また、本編でトゥチのチーフが豚を褒め称える場面では、聞き手の笑いを誘う。笑いがうまれる理由は、トゥチのチーフが統治を担った歴史を聞き手は認識しており、そのような位の高い者が、避けられてきた豚を賞賛するところにユーモアが込められているためである。このように、ルワンダの人々がこの詩で笑う理由を分析すると、ルワンダの人々が認識している歴史的背景が見えてくる。

さらに「インショベラマハンガ」、すなわち直訳と真意が異なる表現は、当時の社会的背景を映し出している。例えば第 3 章で、宴で振る舞う豚を飼う者を探し出す場面がある。宴を仕切るリーダーは、豚を隠していると睨んだチーフに「お喋りはもうたくさんだ！」、「お前が本当に強いということを王に話すのだ！」、「ソルガムの偽の耳に告げ口した！」とまくし立て、チーフは豚の在り処を白状する[20]（Kagame 1977: 16）。リーダーの台詞に突然出てきた「ソルガムの偽の耳に告げ口した！」というインショベラマハンガは、「真実を明らかにせよ」という真意である。作者は、ルワンダの人々に馴染みのある「ソルガム」という言葉を意図的に用いて聞き手を惹き付けている。このようなユニークな表現方法も、この詩がルワンダで長く聞き伝えされてきた理由であると考えられる。

7. おわりに

本稿では、『ジャガイモをおいしくするもの』を分析し、詩が表すルワンダの歴史的・社会的背景について考察した。まず明らかになったのは、「インショベラマハンガ」と呼ばれ

[20] ソルガムはイネ科の穀物である。茎の先端の穂が耳の形に似ていることから、「ソルガムの偽の耳（*inopfu*）」というルワンダ語がある。

る直訳と真意が異なる表現である。作者のカガメは、思考を惑わせる表現を本編に敢えて盛り込み、聞き手に知的探究心を持たせようとしている。インショベラマハンガには人々の生活に馴染みのある言葉も用いられるため、当時の社会的背景が映し出されている。

次に分析したのは、カガメのユーモアに溢れる筆致である。カガメは古典的な詩の形式を研究し、その形式に忠実に従うと同時に、豚を活躍させるという独自のアイデアをこの詩に反映させた。詩の本編には、トゥチのチーフが豚を賞賛して笑いを誘う場面がある。聞き手は、チーフが位の高い者であったという史実を認識しているため、統治者が位の低い豚を褒め称える場面に作者の皮肉なユーモアが込められ、笑いがうまれる。また、この詩にはトゥチを優遇する描写があり、そこにはカガメが「ハム仮説」を支持した背景があると推察できる。さらに、本編に実在の人物が登場することや、巻末のチーフ名一覧も史実を知る手掛かりになる。この詩を読解すると、統治体制や思想に関する重要な歴史事項を堀り下げることができる。

続いて、*imbabazi* という言葉の意味合いが、歴史に沿って変化していることに着目した。この詩に出てくる *imbabazi* は、人々の「共感」や「喜び」を意味するが、ルワンダのジェノサイドにおける和解で使われる *imbabazi* は、当事者間の「赦し」を意味する。このようにジェノサイド以降、*imbabazi* の意味合いも変化していることが明らかになった。

最後に「ジャガイモをおいしくするもの」という言葉の由来からは、この詩をきっかけに豚肉やジャガイモを食する習慣がルワンダに広まったと考えられていることが分かった。食用の豚とジャガイモは 20 世紀初めにヨーロッパ人の宣教団に持ち込まれ、ルワンダではそれらを食するのは避けられていたが、宴で位の高い者に振る舞われて好評を博したことから、市井の人々に豚とジャガイモが広まった経緯が明らかになった。

『ジャガイモをおいしくするもの』は、ルワンダの人々の笑いを誘う。なぜ笑いがうまれるのかを分析すると、軽んじられていた豚が活躍する描写が面白可笑しいという理由に加えて、ルワンダの人々が、詩の描写に滲む歴史的・社会的背景を充分に認識しているためである。本稿が『ジャガイモをおいしくするもの』を分析したのは、この詩がルワンダの背景を捉えるうえで、外国人にも門戸を開く重要な文献と考えられるためである。

謝辞

査読者から貴重なコメントをいただき、感謝いたします。また、詩の読解を手伝って頂いたルワンダ人のムタバージ・ティボルト氏（Mutabazi Thibault）、ドゥクズムレミ・ディオドネ氏（Dukuzumuremyi Dieudonne）、ンドゥワイェーズ・ガブリエル氏（Nduwayezu Gabriel）、ウムカミシャ・ディディネ氏（Umukamisha Didine）に感謝いたします。最後に、この詩集を私に紹介してくれたムダヒニュカ・チャールズ神父（Mudahinyuka Charles）に感謝いたします。神父は2018年1月、享年65歳でご逝去されました。多くの聖歌を作詞作曲し、天国でも楽しく歌っておられるような気がします。心よりご冥福をお祈りします。

参考文献

片山夏紀. 2019. 「ガチャチャ裁判が命じた賠償をめぐる当事者の交渉―ルワンダ・ジェノサイドに関連する罪の赦しと和解」『アフリカレポート』57, 22-33.

武内進一. 2009. 『現代アフリカの紛争と国家―ポストコロニアル家産制国家とルワンダ・ジェノサイド』明石書店.

――― 2016. 「アフリカの『三選問題』―ブルンジ、ルワンダ、コンゴ共和国の事例から」『アフリカレポート』54, 73-84.

鶴田綾. 2018. 『ジェノサイド再考―歴史のなかのルワンダ』名古屋大学出版会.

Kagame, Alexis. 1977. *Indyohesha-birayi*. Butare, Diocèze.

NISR (National Institute of Statistics of Rwanda). 2014. *Fourth Population and Housing Census: Final Results Publication Tables*. Kigali, Republic of Rwanda.

UNSC (United Nations Security Council). 2001. *Report of the Panel of Experts on the Illegal Exploitation of Natural Resources and Other Forms of Wealth of the Democratic Republic of the Congo*. (S/2001/357).

Vansina, Jan. 1985. *Oral Tradition as History*. Madison, The University of Wisconsin Press.